

2017年2月20日

世田谷区長 保坂展人様
世田谷区議会議長 上島よしもり様

DOCOMOMO Japan 代表

松隈



世田谷区第一庁舎区民会館 再生活用に関する要望書

拝啓、時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

本会は、20世紀の建築と環境遺産の価値を認め、その保存、活用を提唱することを目的の一つとする、国際的な非政府組織 DOCOMOMO (Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of Modern Movement=モダン・ムーブメントに関わる建物と環境形成の記録調査および保存のための組織)の日本支部です。2009年11月25日に、世田谷区第一庁舎・区民会館の保存要望書を提出しました折には、ご多忙の中ご説明の機会をいただき、誠にありがとうございました。またいくつかご質疑をいただき、2010年2月に、ご報告とご提案を致しましたが、世田谷区本庁舎等整備基本構想がまとめられ、整備に向けた準備が進められていると伺いました。すでにご存知のように「世田谷区第一庁舎及び区民会館」はル・コルビュジエの弟子である前川國男の代表作の一つであると共に、戦後の日本の庁舎及び市民会館として貴重な建築作品であるばかりか、世界的にも知られた近現代建築であることから、「世田谷区第一庁舎及び区民会館」の再生活用を改めて要望する次第です。特に、西洋美術館の世界遺産登録を受けて、今後、ル・コルビュジエに師事した日本人建築家の仕事への注目が世界レベルで集まることが予想され、この「世田谷区第一庁舎及び区民会館」が、そうした再評価の中で重要な位置を占めることは明らかです。特に世田谷区第一庁舎と区民会館の間のピロティから中庭へ続く空間は大変貴重です。現在の状況では想像しにくいですが、世田谷区第一庁舎、区民会館とも、再生すれば新築同様の機能となり使い続けることが可能です。価値について以下にまとめましたので、再整備にあたりましてご配慮いただき、既存建築の活用をお願いする次第です。

1) ル・コルビュジエの弟子である前川國男の代表作で、文化財として後世に継承すべき建築である。

ル・コルビュジエが設計した西洋美術館(1959年)は、重要文化財となり昨年世界遺産に登録され、日本でもようやく戦後の建築が文化財として社会の脚光を浴びるようになりました。その西洋美術館の実務を国内で担当したのがル・コルビュジエの弟子達で、「世田谷区第一庁舎及び区民会館」の設計者である前川國男もその一人です。前川國男はル・コルビュジエの近代建築の理念を日本に定着させることを生涯のテーマとし、文化施設と庁舎の複合建築として戦後はじめて取り組んだのが「世田谷区第一庁舎及び区民会館」です。日本の気候風土と共生させるため水平線を強調し庇やバルコニーを設け、区民のコモンスペースとして広場を囲む新たな時代の庁舎建築を提案しました。そしてこの考えは、その後の京都会館(1960年)東京文化会館(1961年)埼玉会館(1966年)等々に継承され前川國男の建築の特徴となっていきました。つまり「世田谷

区第一庁舎及び区民会館」は、ル・コルビュジェの理念を反映した前川國男の建築の源流となった大変貴重な建築であると位置づけられます。竣工時には、国内外の七誌に12回掲載(注1)され、新建築では西洋美術館と同一号の巻頭に取り上げられ、当時、建築界の話題となりました。「世田谷区第一庁舎及び区民会館」の広場を中心とした計画は、戦前の権威主義から戦後市民社会への移行を明確に示したデザインであり、コストを抑えながら当時最新の技術を用いて建設されました。区民のためにつくられた「世田谷区第一庁舎及び区民会館」は、戦後市民社会の象徴する後世に継承すべき世田谷区の貴重な文化財です。文化財として価値ある建築を解体し、戦後市民社会を的確に伝えてきた歴史を失ってしまうことは、世田谷区がこれまで区民と共に培ってきたアイデンティティを忘却するに等しく活用し継承されることを強く要望致します。

2) 世田谷区の記憶であり世田谷の住環境の保全のためにも使い続けていく

1959年に先に、結婚式場・図書館のある区民会館から建設されました。「世田谷区第一庁舎及び区民会館」は、多くの夫婦の記憶となり、そして成人式や演奏会等に参加した区民、区民サービスを担った職員等の掛け替えのない記憶の一部となっています。そして、世田谷の落ち着いた住環境に溶け込むように区民会館・区庁舎・広場が配置されています。住環境の保全には、現状の住環境を構成している既存の樹木や歴史的な建築を活かしていくことが肝要です。この世田谷の誇る住環境は、既存の優れた建築を活用してはじめて継承が可能となり、人々の記憶、つまり世田谷の文化として引き継がれていくべきものと考えます。

3) 「世田谷区第一庁舎及び区民会館」を使い続けることは可能か。またメリットはあるのか？

既存建築の改修は、その方法や用途の変更により結果は異なりますが、基本的には解体新築よりは、廉価に実施することが可能です。改修手順を検討することにより、工期の短縮・移転費の抑制も不可能ではありません。耐震性能や機能性も、新築の建築とほぼ同等にまで引き上げることができます。また、何よりも廃材が解体新築より少なく、改築する際の地球環境の温暖化防止に貢献します。

第一庁舎は中央に吹抜があり、自然換気に活用することができ、その骨格自体が現代の奥行き深い執務スペースより環境的に優位な形状です。区民ホールもその骨格が音響的に優れた形態で、バックスペースや舞台機構、客席、トイレ等の改修により見違えるようなホールとなります。それらが新築のコストより安く改修できるので節税効果は非常に大きなものとなります。

以上から「世田谷区第一庁舎及び区民会館」の再整備につきましては、文化面、環境面、コスト面で新築より優位な既存建築の活用をお願いする次第です。尚、本会は、この建築の再整備に関して、学術的・技術的な協力を可能な限りさせていただき所存です。

謹白

(注1) 新建築 1959年7月号 1960年1月号 / 国際建築 1957年9月号 1959年7月号 / 建築文化 1958年6月号 1960年1月号 1961年5月号 / 近代建築 1961年5月号 / Architectural Design 1961年2月号 1965年5月号 / Architectural Record 1961年4月号 / Progressive Architecture 1965年4月号